

幸府画報

第 11 号

2022 年 3 月
(令和 4 年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課



バックナンバーはこちらから

調査見聞

市民とともに

吉嗣家印章調査

印章調査のはじまり

令和 3 年 3 月、太宰府の絵師調査事業の一環として、「吉嗣家資料【印章編】」が刊行されました。300 点を超える印章や印材の画像が関連情報とともに収録され、江戸末期から昭和時代にかけて活躍した吉嗣家三代の絵師たちの足跡を伝えていきます。

印章調査の必要性が最初に説かれたのは、平成 10 年（1998）5 月に太宰府市文化ふれあい館で開催された特別展示「太宰府の絵師―齊藤秋圃・吉嗣家・萱島家の絵師たち」



平成 10 年度特別展の様子

ち」の折でした。この展覧会は、『太宰府市史―建築・美術工芸資料編』の発刊記念を兼ねており、それまで取り上げられることのない少なかった近代の太宰府に焦点を当て、太宰府の絵師と各地の文人との多彩な交流の一端をご紹介します。

このとき、紙幅の都合で市史に掲載できなかった関連資料の継続的な調査、中でも印章調査の実施が、作品の制作年代や真贋の特定に不可欠であると指摘されたのです。そこでまず、多くの印章を伝えてきた吉嗣家のご協力を得て、計 253 顆の印章・印材を文化ふれあい館でお預かりし、展覧会のフォローアップ調査がスタートしました。

市民との共同作業

調査は、印章の収蔵場所の確保にはじまり、個体の形や材質の分類、計測、ナンバリング、印面の撮影と押印作業などを 10 年にかけて行いました。特筆すべきは、調査に市民の参加を頂いたことです。館が主催した拓本講座の卒業生が中心となって結成した市民団体「太宰府拓友会」は、講座で学んだ知識と技術の維持向上のため、主に市内の石碑を採掘してきました。その長年の活動実績と高い技術を活かして調査への協力をお願いし



(上) 印の側款を採る
(下) 印面に印泥をつけ押印する作業

たところ、「市民が貴重な資料に直接触れられる絶好の勉強の機会」と喜んで頂き、さまざまな印面の押印、また印章側面の細字（側款）の採拓、そのための道具づくりや紙選びなどにも積極的に関わって頂きました。

今後に期待すること

調査に市民の目線が加えられた結果、逆にそのネットワークから多くの関連情報が館に集まるようになりました。太宰府市内や周辺地域はもとより、九州各県、そして全国各地に、まだ知られていない太宰府の絵師たちの作品が数多く眠っていると考えられます。本格的な調査は絵師調査チームに引き継がれ、研究もまだ始まったばかりですが、一人でも多くの方に関心を寄せて頂くことで調査の裾野がさらに



作業中の太宰府拓友会の皆さん

広がり、絵師を紹介して近代の太宰府に花開いた文化がどのようなものであったか、解明されていくことを期待したいと思います。
(井上理香)

メイショ メイブツ

【竈門岩】

宝満山を登ってゆくと、8 合目あたりに目立つ姿の巨石があります。鼎形に三つ並んだ様子が鍋や釜を据えるかまどに見えることから、竈門山の名の由来のひとつとされ、石は竈門岩と称されています。

この竈門岩はいつの頃か一石が倒れて苔に埋まっていたといい、江戸時代の文化 13 年（1816）に再興されました。三石のひとつである亀岩に再興事業の由緒が刻まれていて、時の天満宮座主が信雅、施主は魚屋武四郎であることを伝えていきます。魚屋武四郎は天満宮に《町並図絵馬》を奉納している博多の商人で、この絵馬の筆者は齋藤秋圃です。齋藤家資料中には「魚屋武四郎父」と書き込みのある人物の画稿も存在しています。

さて、三石のうち二石には、大きく「仙竈」の二字が刻まれています。この書は博多の禅僧で絵をよくした仙厓和尚のものです。齋藤秋圃とも親しかった仙厓は、何度も太宰府を訪れており、宝満山や都府楼、観世音寺の風景を描いた作品をのこしています。（井形栄子）



(上) 宝満山中の竈門岩



(左) 《魚屋武四郎父》
齋藤家資料

逸品探訪

大宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介し

齋藤秋圃 作

【熊谷直実と平敦盛凶絵馬】

源平合戦の名場面

源氏の武将熊谷直実が平家の若武者平敦盛を一騎打ちの末に手にかけるという『平家物語』一ノ谷合戦の話を主題としています。悲しく無常な物語は、能や文楽の題材となり、絵馬や屏風、浮世絵など、絵画の主題としても多く採り上げられました。

秋圃の個性が全開

画面は、海へ逃れようとする敦盛を、追ってきた直実が扇を広げて呼び止める瞬間を描いています。母衣（後ろからの攻撃から身を守る防具）の赤と白、馬の毛色の白と黒、追う直実と振り返る敦盛の動と静、というように、モチーフは対比的に描かれ、激しくも美しい



板絵着色 114.5 × 151.7cm
天保11年(1840)奉納
筑紫野市歴史博物館所蔵



部分図

な出来事があったと想像されま。さて、敦盛と直実が託された願いは何だったのかと、思いをめぐらせてみましょう。

(井形栄子)

いちまい 賞鑑 画稿

齋藤家資料

【四睡図】



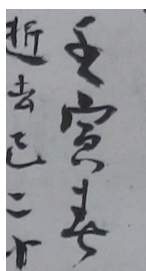
紙本墨画 24.5 × 21.8cm

今年の干支にちなみ、虎の描かれた画稿をご紹介します。四睡図とは、中国・唐時代の高僧である豊干禪師と、虎、寒山、拾得の四者が眠る姿を描いた絵画のことです。豊干禪師は天台山国清寺の僧で、奇行で知ら

ひとこと
くずし字

【壬寅】

右の画稿鑑賞でも触れられているように、今年寅年で、干支でいうと「壬寅」にあたります。十干と十二支を組み合わせる干支は60年周期となり、齋藤家や吉嗣家の資料にも今から120年前や180年前の「壬寅」の文字が見られます。



画像を見ると、「壬」は二画目の払いはそのままで、「土」部分は筆順が通常と異なり、縦線から始まり「の」のように書いて下の横線へとながります。「寅」はウ冠の下がひらがなの「系」のように書かれている

れ、虎に乗って寺内を歩いたと伝わります。寒山と拾得は、豊干の弟子とされる隠者で、寒山は巻物を、拾得は箒を持った姿で描かれることが多いです。三人ともに、古来、流派を問わず多様な絵画に描かれてきた人物たちですが、なかでもこの画題は、禅の悟りの境地を示すものとされています。

画面手前にいるのは、輪郭線を用いずに墨のぼかしを活かして描く、いわゆる没骨の技法で表現された虎です。丸まった寝姿は猫のようでもあります。その奥に、縦に連なる構図で描かれる豊干、寒山、拾得は、膝を抱えてまどろんでいます。モチーフの丸い形態が呼応し合い、皆が微笑みを浮かべているのもあって、画題の難解で深遠なイメージとは異なり、画中には柔らかな雰囲気を感じています。

(日野綾子)

のが特徴的です。下の字と合わせて「壬寅春」と書かれており、年代と季節がここから分かります。

この資料は筑前出身で南画家として活躍した中西耕石を描いたもので、絵を木村耕巖、題字を宮小路浩潮、賛文を吉嗣拜山が書いています。耕巖・拜山は中西耕石に師事した門下生でした。本資料は明治35年(1902)に太宰府天満宮で執り行われた中西耕石の二十回忌の際に作成されたものと思われ、三人の耕石に対する追慕の念がうかがえます。(木村純也)

《中西耕石像》明治35年(1902) 吉嗣家資料

